

平成 27 年度 第 1 回

国 語

〔注意事項〕

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷き、シャープペンシルおよび電算機付きの時計の使用を禁止します。
また鉛筆は、HB を使用して下さい。(持っていない場合は、ほかの濃さでもかまいませんが、濃く書くようにして下さい)
- 4 開始のチャイムが鳴るまで問題用紙を開かず、手を触れないで下さい。
- 5 考査中はよそ見をせず、きちんとした態度で行って下さい。
- 6 何か物を落としたら、黙って手をあげて下さい。
- 7 他の受験生に迷惑となるような行為をしないで下さい。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

優香の通う小学校には、開校以来の伝統があるらしい。卒業生全員に自分の顔を描かせ、それを一枚の大きな台紙に貼ってパネルにして、卒業年度順に体育館の二階の壁に飾っていくのだという。

「だから、一人でも絵が揃ってないとパネルが作れないのよ。それで岡本先生も困ってるの」

「あいつ、絵は得意なのに、どうしちゃったんだ？」

「学校ではぜんぜん描けなかったんだって。鉛筆持って、ずーっと画用紙を見てるんだけど、手が動かないの。一生残るものだからプレッシャー感じてるんだらうって、おとといから宿題にしてくれてたの」

「それでもまだ描けないのか？」

「描くことは描いてるのよ。でもね、学校に出せるような絵じゃないの。ゆうべ優香に見せられて、もう、わたし、ぞっとしちゃって……」

綾子はリビングのマガジンラックからインテリア雑誌を取り出して、ページに挟んであった画用紙を二枚、政彦に見せた。

二枚とも、髪と顔の形や色はさっき優香の部屋で見た絵と同じで、目鼻や口も描いてあった。

だが——綾子の言っていた意味は、すぐにわかった。

一枚の絵は、三日月のような細く瞳のない目が吊り上がっていた。口も両端がまるで裂けたようにめくれあがっている。秀明がまだ小学生の頃に買ってやった江戸川乱歩の本の挿絵にあった邪悪な仮面のような顔だ。

もう一枚は、雪だるまだった。黒の絵の具で真ん丸に塗りつぶした両目と、同じ黒で横一直線の口。だが、タドンと炭でつくった雪だるまの顔にある素朴な愛嬌は、ここにはない。黒い両目はただの穴ぼこで、外の世界をなにも見ていないし、内側の感情をにじませてもない。口も、ただの一本の棒だ。その一瞬前に笑っていたのか、一瞬あとには怒りだすのか、そういうものがなにも伝わってこない。からっぽの顔だ。邪悪な仮面の顔よりも、むしろこっちのほうが、ぞっとする。

「あの子だって、これを本気で先生に出すつもりはなかったと思うけど……でもふつう描かないわよね、こんな絵」

黙ってうなずいた。これが自画像——？ ふざけて描いたにしても、あまりに暗く、救いがないし、なにより優香はこういうときにふざけるような子ではない。

綾子は、二枚の絵をまた雑誌に挟んで、「あなたには見せるなって言われてるの」とつぶやくように言った。

「優香に？」

「そう。お父さんにはなにも言わないでって。ゆうべもそのことばかり、ずーっと言っていたの」

「……なんでだ」

綾子は政彦の問いをいなすように席を立ち、食器棚から自分のカップを持ってきてミントティーを注いだ。

「なんで俺に知られなくなかったんだ？」

あらためて、さっきよりは少し冷静な口調で訊いた。

「優香ね、卒業式の答辞、読みたくなかったって。中学も公立に行きたいって」

「……どういふこと？」

「わたしはそんな子じゃないから、って。みんなが思ってるようないい子じゃないんだからって」

最初に訊いたことの答えにはなっていないかったが、政彦は話をつづけるよう目でうながした。

『風の子学園』に出かけた日のことだ。

学園の先生の案内で校内を見学したあと、学園に通う耳の不自由な子どもたちといっしょに遊ぶことになった。それは前もって岡本先生を通じて、優香がぜひにと頼んでいたことでもあった。

優香たちと人数を合わせて、補聴器を耳につけた五人の子がグラウンドに来た。男の子が三人に、女の子が二人。優香たちは五人とも女の子だった。

男の子たちは、馬跳びで遊びたい、と筆談で伝えた。学園の女の子二人は、あやとりをしたいのだという。馬跳びは乱暴すぎるし、あやとりでは男の子が満足しない。

少し離れたところでは、岡本先生と学園の先生がにこにこ笑いながら子どもたちを見ていた。

橋本優香さんに任せておけばだいじょうぶですよ——と岡本先生が言っているように、優香には見えた。学園の先生の笑顔も、さあ優香さん、がんばって話をまとめてみてごらん——と言っているようだった。

優香はふと思いついたアイデアを、学園の子のために大きな声で口にした。

「『だるまさんがころんだ』やらない？ これだったら、男子も女子も遊べるから」

学園の子は、A した顔になった。遊び方を知らないのだろうかと思って、優香は筆談に身振り手振りを交えてルールを説明していった。

鬼が壁に向かって目をつぶって、数を数える代わりに「だるまさんが、ころんだ」と言う。鬼以外の子は、その間に鬼に近づいていく。鬼は、「だるまさんが、ころんだ」を言い終えると同時に後ろを振り向いて、その瞬間、みんなは体の動きを止めて……。

途中で、気づいた。顔から血の気がひくのがわかった。

学園の子は、「だるまさんが、ころんだ」の声を聞き取れない——。

少し遅れて、クラスの友だちもそれに気づいた。ちょっとまずいよと目配せされ、あの子たちかわいそうだよと耳打ちされた。

優香はとっさに後ろを振り向いた。岡本先生と学園の先生は、まだ優香を見ていた。笑っていた。苦笑いに見えた。この子は意外と無神経だったんだなあ——と

あきれているように、見えた。

黙りこくってしまった優香に代わって、別の友だちが鬼ごっこを提案して、学園の五人も賛成して、みんなで遊んだ。

④ 優香は笑いながら鬼から逃げ、鬼になったら楽しそうにみんなを追いかけた。

そのときからずっと、今日に至るまで、本気で笑ったことは一度もない。

綾子は話を終えると二階に上がり、優香の様子を見てきた。

「よく寝てる。ゆうべはほとんど徹夜だったみたいだから」

政彦は唇を噛みしめる。なにも気づかなかった。夢にも思っていなかった。綾子の寝室は政彦の隣だし、階段から自分の部屋に向かう途中、優香の部屋の前も通る。政彦がぐっすりと寝入っている間、優香は真っ白な画用紙をぼんやりと見つめ、綾子はそんな娘の苦しみを胸の中にしまい込んでいたのだ。

ゆうべだけではない、綾子は『風の子学園』のできごとを、数日前に優香から聞き出していた。「お父さんにはゼッタイに言わないから」という約束付きで。

「まさか自分の顔が描けなくなるほどだとは思わなかったけど……」綾子は寂しそうに笑った。「あの子、完璧主義のところがあるからね」

『だるまさんがころんだ』を提案した自分を無神経で残酷な子なんだと責めることに始まって、自己嫌悪はどんどんエスカレートしていった。

先生に叱られるのが怖かったから、学園の子に謝る前に岡本先生の方を振り向いてしまった。

けっきょく学園の子に謝らなかったのは、あのままこまかしたかったから。

その前に、ふと思いついただけの『だるまさんがころんだ』をきちんと考えることなく大きな声で提案してしまったのは、やっぱり橋本さんはしっかりしてるわね、と先生に褒めてもらいたかったから。

さらにその前に、『風の子学園』に行きたいと言ったのも、学園の子と友だちになりたかったのではなく、耳の不自由な子を見てみたかっただけなのかもしれない。もしかしたら同情して、バカにしたかったのかもしれない。優等生にふさわしい、いいことを探して、『風の子学園』を選んだのかもしれない……。

「悪いほうに悪いほうに考えちゃうのよね。なまじっか頭がいいから、よけいなことまで思い当たっちゃって」

友だちから、あとでなにか言われたわけではない。岡本先生も、ゆうべの電話で綾子がいきさつを話すと、『だるまさんがころんだ』の提案したい知らなかった、と驚いていたらしい。

だから——優香は一人で勝手に思い込んで、一人で勝手に落ち込んで、一人で勝手に自己嫌悪に陥り、一人で勝手に自分の素顔を邪悪で空虚なものにしてしまった、ということになる。

政彦は長く尾をひくため息をついて、息の最後に「なあ」と声を載せた。

「優香の絵、おまえが代わりに描いてやることできないか？」

うつむいていた綾子が顔を上げる。そんなことを考えてもみなかった、というまなざしが返ってくる。

「だって、しょうがないじゃないか。卒業式までにパネルになってないとまずいんだろ？ もう時間がないし、ほかの子に迷惑をかけるわけにもいかないし」

だが、綾子はまなざしを強めて言った。

「だめよ、それは」

「なんでだよ」

「わたしは、もしどうしても描けないんだったら、あの子の絵、入れてもらわなくていいと思うの。優香もそれでいいって言うてるし、先生にはわたしのほうからちゃんと説明するから……」

「なに言ってるんだ」ものわかりの悪さに、いらだった。「考えてみろよ。そのパネルってずっと貼ってあるんだぞ。一生のことなんだから、あとで後悔したって遅いんだから」

政彦はテーブルに身を乗り出して言った。間違っていない。ゼッタイに。

綾子は政彦から目をそらして、B 笑みを漏らした。

「お父さんに黙っててって優香が言ったのは、そういうところなのよ」

どうしてそれがわからないわけ？ と小1 をか上げた。

重松清「かさぶたまふた」より（一部、改変があります。）

* タドン……木炭や石炭の粉をこねて丸めたものをかわかして作った燃料。

* いなす……相手の追及をかわす。

* なまじっか……中途半端であるさま。

問一 A B に最も適する語を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア きょんと イ ふっと ウ さっさと エ ぞっと

問二 部①「みんなが思ってるようないい子じゃない」とありますが、このときの優香は自分のことをどのような子だと考えていますか。文中から八字で抜き出して答えなさい。

問三 部②「顔から血の気がひくのがわかった」とありますが、優香がそのような状態になったのはなぜですか。理由を簡潔にまとめなさい。

問四 部③「この子は意外と無神経だったんだなあ」とあきれているように、見えた」とありますが、これが優香の思い違いであることが分かる一文を文中から探し出し、その文の最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。(句読点も字数に含みます。)

問五 部④「優香は笑いながら鬼から逃げ、鬼になったら楽しそうにみんなを追いかけた」とありますが、このときの優香の気持ちとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が犯した失敗をどうにかしてごまかしたいという気持ち

イ せっかく来たのだから精一杯楽しみたいという気持ち

ウ 学園の子たちに自分の明るさをアピールしたいという気持ち

エ 自分の意見が聞き入れられなかった悲しさを隠したいという気持ち

問六 部⑤「空虚」と同じ意味の語句を文中から探し、ひらがな四字で答えなさい。

問七 部⑥「そういうところ」とありますが、どのようなところですか。最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ものごとを何でも大げさに考えすぎるところ

イ 優香のことにまったく関心をもたないところ

ウ 自分が正しいと思うことを押しつけようとするところ

エ 優香や綾子の意見にいつも反対ばかりするところ

問八 1 に適する語を漢字一字で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もともと日本人は、「自己」とか「個性」をさほど大切なものとは思っていなかったし、今でも本当はそんなものを必要としていないのではないだろうか。

最近、ハーバードのビジネススクールの教授が書いた本を読みました。それにこんなエピソードがあります。「人生で自分自身で決めたいことはなにか」と日米の大学生に書かせてみたところ、アメリカ人の学生は配られた紙の裏側まで使ってびっしりと書いた。A、日本の大学生は、「住まい」とか「仕事」とか、二行程度書いておしまいだった。

このエピソードをどう考えるべきか。

きっと「自己の確立」や「個性の発揮」を大切だと考える人は、B 日本の学生はダメなんだ」と言うのでしょうか。

「自分のことは積極的に自分で決めなくてはいけない、そうやって道を切り拓くべきだ、そのためには大学生にディベートを叩き込み、個性を伸ばせ、そうしないと、これからのグローバル化した社会を生き抜くことはできない」

こうした論調はよく目にします。

でも、日本の大学生にそういう意味での「自己」や「個性」がないのだとすれば、そしてずっと日本人がそういう性質なのだとすれば、それはそういうものを強く求めない文化が日本にあるからだ、と考えたほうがいいのではないのでしょうか。

アメリカの文化は、常に周囲がその人に対して「自己」をつくるように求めています。① 強要してくるといってもいい。それが一番端的に表れるのが、

「コーヒーにしますか？ 紅茶にしますか？」

という質問です。いろんなところでそう聞かれるけれども、たいてい私はどっちでもいい。ところが、「どっちでもいいよ、そっちの都合で」と英語で言うのは、意外と面倒なのです。

アメリカは、「あなたはこれか？ あれか？」と選択を迫ってくる文化を持っています。それに常に答え続けるとは、どういうことか。つまり答えるうちに、「自己」「個性」をつくっていかざるをえないのです。

「コーヒーにします」

そう答えた時点で、「自分はこういう時にコーヒーと答える人間だ」という項目が「自分」の構成要素として確立されます。別の時に、

「ビールにしますか？ チキンにしますか？」

と聞かれて、

「チキンです」

と答えれば、「基本的に自分はチキン派だ」という項目が立ちます。

日本はどうか。どこかに邪魔して座ると、黙ってお茶が出てくる。もちろん近頃では「お飲み物は何がよろしいでしょうか？」と聞いてくることもあるでしょうが、聞かれないことが多い。

黙って出されて、黙って飲む。そういう人が大半です。

そこで「私はコーヒー派なので、お茶はいりません」と我を張る人は、たいてい嫌がられます。面倒くさいやつだと思われることでしょう。この文化の差は些細に見えるかもしれませんが、かなり根本的な違いです。たまたまアメリカを例にしましたが、ヨーロッパでも同じようなものです。

だから日本人は優れているとか、劣っているとか、そういう話をしたいのではありません。そういう文化で私達は育っている、ということです。これは簡単に意識で変えられるようなものではない。

試みに、先ほどの大学生への課題を自分で考えてみればいいでしょう。「人生で自分自身で決めたいこと」はなにか。A4判の紙で裏までビッシリ書ける人がどれだけいるでしょうか。結構、「それは

X

」で済ますものが多いのではないのでしょうか。

(中略)

「個性を伸ばせ」「自己を確立せよ」といった教育は、若い人に無理を要求してきただけなのではないでしょうか。身の丈に合わないことを強いているのですから、結果が良くなるはずありません。

それよりは世間と折り合うことの大切さを教えたほうが、はるかにましではないでしょうか。

こういう話をする、「それでは世間や他人の顔色をうかがってばかりの人間だけになってしまわないか」という人がいるかもしれませんが。「それでは社会が前に進まないではないか」と。

でも、そんな心配は要りません。

世間に押しつぶされそうになってもつぶれないものが「個性」です。

結局、誰しも世間と折り合えない部分は出てきます。それで折り合えないところについては、ケンカすればいいのです。それで世間が勝つか、自分が勝つかはわかりません。でも、それでも残った自分が「本当の自分」のはずです。

「本当の自分」とは、徹底的に争ったあとにも残る。むしろ、そういう過程を経ないと見えてこないという面がある。最初から発見できるものでも、発揮できるものでもありません。

日本の伝統芸能の世界は、そのことをよく示しています。入門した弟子は、まず徹底的に師匠の真似をさせられます。

「とにかく同じようにやれ」

その過程が一〇年、二〇年と続きます。

そんなふうにしても師匠のクローンをつくることはできません。どこかがどうしても違ってくる。その違いこそが、師匠の個性であり、また弟子の個性でもあります。徹底的に真似をすることから個性は生まれるのです。

弟子入りの最初の段階から「個性を伸ばせ」などと言っても意味がない。それは伝統芸能を学んだことがない人でも、ピンと来るのではないのでしょうか。

養老孟司『自分』の壁』より（一部、改変があります。）

*ハーバードのビジネススクール……アメリカにある、ハーバード大学の経営大学院。

*A4判……たて二百十ミリメートル、よこ二百九十七ミリメートルの紙の寸法。

*クローン……生物のコピーのこと。

問一 文中の A B に当てはまる語として最も適するものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア または イ だから ウ 一方で エ たとえば

問二 文中の X に入れる言葉として最も適するものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が決めること イ 世間が決めること ウ もう決まっていること エ 師匠が決めること

問三 部①「自己」をつくるように求めています」とありますが、アメリカの文化では、どのように「自己」をつくっていくのだと筆者は述べていますか。説明しなさい。

問四 部②「身の丈に合わないことを強いている」とは、ここではどうすることですか。説明しなさい。

問五 部③「世間と折り合えない部分」とは、どういう部分ですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 徹底的にケンカしてもつぶれずに残っている部分。

イ 自分では決められず他人に決めてもらう部分。

ウ 常識や習慣などと自分のしたいことがくいちがう部分。

エ 他人には決められず自分で決めるしかない部分。

問六 部④「意味がない」というのはなぜですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 個性は、真似をすることそのもので、真似をすることのほかにするべきことはなく、不必要だから。

イ 個性は、アメリカやヨーロッパの文化で生まれるもので、日本の文化でそれを伸ばそうとしても無理だから。

ウ 個性は、徹底的に師匠の真似をしたすえに生まれるもので、それをせずに最初から伸ばそうとしても不可能だから。

エ 個性は、伝統文化を徹底的に学んだうえで生まれるもので、伝統文化に関わりのない人が伸ばせるものではないから。

問七 本文の内容に合っているものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の文化とアメリカやヨーロッパの文化との違いをふまえない教育には無理があり、良い結果にならない。

イ 日本の文化は、世間や他人の顔色をうかがってばかりの人間が育ってしまいがちであるという点で、問題がある。

ウ 自分自身で積極的に生き方を決めていくアメリカやヨーロッパの文化を、日本人は見習い、取り入れていくべきである。

エ 世間と折り合いをつける日本の文化は、伝統文化にも通じており、アメリカの文化よりも優れていて大切にすべきものである。

三 このわざについての次の問題に答えなさい。

問一 次の 〇 に当てはまる漢字一字を入れてことわざを完成させるとき、他の三つと異なる語が入るものを一つ選び、記号で答えなさい。

(1) ア 〇 の上にも三年

イ 他山の 〇

ウ 〇 橋を叩いて渡る

エ 時は 〇 なり

(2) ア 竹 〇 の友

イ 立て板に 〇

ウ 尻 〇 に乗る

エ 〇 の耳に念仏

(3) ア 知らぬが 〇

イ 〇 作って魂入れず

ウ 枯れ木も 〇 のにぎわい

エ 〇 の顔も三度

問二 次の 〇 に当てはまる漢字一字を入れてことわざを完成させるとき、(1)～(4)の 〇 の語を組み合わせでできる四字熟語を答えなさい。

(1) 立つ 〇 あとをに 〇 いはず

(2) 〇 とすっぽん

(3) 〇 前の灯

(4) 〇 より団子

四 次の――部の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して書きなさい。

- 1 夏休みに郷里に帰る。
- 2 方角を知るのに方位磁針を使う。
- 3 あまりの高さに身が縮んだ。
- 4 ガイロジュが紅葉する。
- 5 駅前カンバンが立ち並ぶ。
- 6 文章を書く前にコウソウをねる。
- 7 インクで布をソめる。
- 8 少年がスガタをあらわすことはなかった。

8字

	＊評点
--	-----